
ランドールの魔女

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランドールの魔女

【Nコード】

N0486Y

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

魔法は危険なものじゃない。ずっとずっと綺麗なもの。みんなを幸せにできる、ちょっとした奇跡なんだから。——これは魔法嫌いの町にやってきた、見習い魔女・ミシャの物語。

零話 遠い炎の記憶

それは、どれほど昔の話か。

教会が保有する古い記録にのみ記される、のどかな町の凄惨な事件。

始まりはわからない。ただ終わりだけが伝えられるそれは、町のほとんどを焼き払うほどの災厄だった。そしてそれらは町に住んでいた二人の魔法使いにより、起こされた人災だった。

魔法使い同士のプライドのぶつかりはいつしか町を飲み込む大火となり、勝者も敗者もいなくなった焼け野原——かつての町に戻った生き残りの人々は叫んだ。

——ああ、魔法などやはり悪魔の力なのだ！

最初に灯った恨みの火は、復興が進むごとに強く輝く。

それはいつしか町に暮らす人々の、共通の信念へと変わっていった。

そんな過去を背負う、メルフェニカ王国ランドール領の小さくも華やかな町に。

「ついたー」

一人の少女がやってきた。

彼女は意気揚々と、事前に連絡をしていた不動産の店に向かう。これから彼女はこの町で暮らすのだ。その青い瞳にはキラキラとした希望が光り、疲れているはずの足取りも軽い。

住民の中には、見慣れない少女に興味の視線を向けるものもいた。

特に同年代と思われる若者は露骨なぐらに意味深な目を向け、仲間とヒソヒソと耳打ちしあっている。

それくらいこの少女――アルテミシア・シエルシュタインは、好感を抱く育ちのよさそうな少女だった。長い黒髪をスラリと伸ばし、白と青が基調の衣服はシンプルだが可憐さもある。

上は白いブラウスとベストで、スカートは一番上に硬くポケットがたくさん付いたエプロンのようなものが付いている。その下にはふわりとした白いスカートが、何枚か重なっていた。

足元は皮のブーツ。腰にもぐると太めのベルトが、ゆるく斜めにつけられている。

少女の普段着というにはゴツく、旅装束にしては少々ラフな格好の彼女を、住民は好意的に受け止めていた。少女もこの町にやってきてよかったと思っていた。

しかし双方共に、決して小さくは無い『誤算』があった。

それは、この町が国立の魔法学校を有するほどの魔法国である、メルフェニカ王国に属する土地でありながら、国内はおろか世界でも類を見ないほどの『魔法嫌いの町』で。

彼女は適切な教育を受けた『魔女』だったこと。

何も知らない少女は、ようやくたどり着いた店の扉をノックする。こうして、羽ばたきたての見習い魔女の、新天地での生活が始まった。

一話 新生活は前途多難

穏やかな草原に広い道が敷かれている。道は適度に整備され、人や馬車が器用にすれ違いながら、各々の目的地へと向かっていく。そんな道を集団で進むキャラバンに、彼女はいた。

かたなかたん、と揺れる馬車に合わせて、彼女の黒髪が揺れる。結構な速度で進んでいた集団は、その町の前で停止した。

「……う？」

心地よい振動に半分ほど寝入っていた少女は、身体を大きく揺さぶられてうつすらと目を開ける。頭はまだ寝ぼけたままだが、馬車が止まっているのは理解できた。

確か……次の町が、自分の目的地だったはず。

そこまで思い出した瞬間、意識が一気に覚醒していく。

慌てて馬車から身を乗り出すと、町の住民らしき人と話していた男性と目が合った。

「おや、お嬢ちゃんお目覚めかい？ お目当ての町に着いたよ」

「ずいぶん疲れてたのねえ。でも今日からはベッドで眠れるわね」

そう言ってにっこりと笑う一組の男女。温和さが服を着ているようなこの二人は、連れ添って何十年にもなるというご夫婦だ。町から町を渡り歩くキャラバンを率いている。

偶然にも拾ってもらった彼女は、おかげでここまで平穏な旅を続けられた。宿にもスムーズに泊まれたし、雇われた傭兵のおかげで野宿も旅路も、この上なく安全安心だった。

「ありがとうございます！」

「いえいえ。修行、がんばってね」

「はい！」

夫人に手を握られ、頭を撫でられる。少女は荷物を引っ張り出す

と、ゆっくりと動き出した馬車の一団に深々と頭を下げた。知り合った子供たちが、こちらを見て手を振っている。

馬車が見えなくなつて、寂しさを振り切るように町に入った。



メルフェニカ王国のランドール領は、他国との国境沿いにある物流拠点を抱える、王都から離れた土地ながらも重要な場所だ。町に入つてすぐの広場には、旅人向けの宿が並ぶ。

特にこの町には領主の屋敷があつて、もしもランドールを国とすると、この町が首都のようなものだろうか。通過するのみだった王都もそうだが、こういう場所はやはり華やかだ。

「ついたー」

その入り口に立つて、アルテミシアーミシヤは大きく身体を伸ばした。

結構快適な旅だったとはいえ、それなりに疲労を感じている。早くふつかふかのベッドで眠りたいなあ、と頭のどこかが囁いた。あの程度の転寝じゃ、寝足りないみたいだ。

ずいぶんと長かった。ミシヤの故郷は他国も他国、海の方こうにある。置手紙一つ残して飛び出てきたが、師匠は心配してくれていると思うが探しはしないと思う。

あの人は、弟子を愛する人だ。だけど弟子の意思を曲げることはしない人だ。

弟子が自分で決めたなら静かに見送ってくれる。それに、出て行った弟子を連れ戻すような時間の余裕など無い。師への弟子入り志願者は、それこそすさまじい数いるのだから。

ミシャが属するシエルシュタインは、魔法使いでもかなりの名門だった。

これまでも、多くの宮廷魔法師や宮廷魔女を輩出してきている。中でもミシャの師は弟子の選び方がいいのか、それとも教え方がいいのか、『あたり』をよく引くので有名だ。

ミシャの姉弟子もこの国の宮廷魔女をしている。王族方に気に入られ、充実した日々を送っていると手紙に書いてあった。できれば弟子としてミシャを、王都に呼びたいとも。

……だけど、ミシャは有名な一門にあるまじきオチコボレだった。かの魔女の目利きも時に見誤る、と笑われる程度には、才能の欠如した弟子だった。

魔法が使えないわけではないのだが、シエルシュタイン一門としては論外。師匠や姉弟子はいろいろと気を使ってくれるが、それでも風当たりはそう心地よいものではなかった。

だから飛び出した。

一門の名に頼らずに生きていくために。

姉弟子の世話にならないために。

それでもシエルシュタインを名乗るのは、赤子で捨てられていたミシャにはそれ以外に名乗る名が無いから。アルテミシアという名前も、育ての親である師匠がつけてくれたものだ。

まあ、魔法使いの家名など、同業者にしかわからないだろう。わかったところで、どうということも無い。血統と違って一門は師弟関係で繋がる。だからシエルシュタインを名乗っている魔法使いは世界中に、たぶんかなりの数がいるだろう。弟子の弟子の……という具合に。

ミシャはただ、その中の一人になるだけだ。

才能に恵まれなかったから、そう目立つことも無いだろう。

だいぶ前からひっそりと準備をし、ミシャは今日という日を迎え

た。

「えっと……確かこっち、だったはず」

地図を手に目指しているのは、この町の不動産を扱う店だ。旅に出る前にてこの町に引っ越したい、という内容の手紙を送ってある。何日も前にここに到着している……と思う。

後は不動産の店で住む家を紹介してもらい、そこに移動するだけだ。一応、それなりのたくわえがあるので、多分そこその家、もしくは部屋を紹介してもらえと思う。

しばらく道を進んでいると、ようやく目当ての店を見つけた。看板が出ているから営業中のようなのだ。

「ごめんくださーい」

ノックをしてから扉を開けて中を覗く。カウンターに初老の男性がいた。どこか難しい表情で新聞を読んでいた男性は、店を覗くミシャに気づくにつこりと笑みを浮かべる。

営業スマイルではあるのだろうが、温和そうな人のいい笑みだった。

ミシャはかばんを床に置き、両手を前でそろえて姿勢を正す。

「えっと……事前に連絡していたアルテミシア・シエルシュタインですけど」

「ええ、覚えていますよ。ずいぶん早い到着ですね」

「キャラバンにくつついてきたので」

「ああ、なるほど。それは運が良かったですな」

店主はいくつかの書類を棚から引っ張り出す。そう広くは無い店内には家を描いた絵がたくさん飾られていて、中には町で見かけた感じのものもあった。

「とりあえずは家ということでもよろしいでしょうか。何かご注文はありますか？」

「大きな鍋が置けるところがいいかなあって」

「……鍋？」

「触媒合成とかに使うので……その、わたし魔女ですから」

見習いですけど、と苦笑するミシャ。

本当はシャレにならないほどのオチコボレなのだが、それを言っても仕方ない。しかし危険なことはいないと誓える。危険な事態になりかねないような魔法を使う、設備も物資もない。

「あ、でも大丈夫です。わたしの専攻は【青色魔法式】なので、爆発とかは――」

「……帰ってくれ」

「は、はい？」

無言になった店主に説明したミシャに、返されたのは低い声だった。カウンターから出てきた店主は、ぐいぐいと背中を押してくる。あつという間にミシャは店からたたき出された。

地面を転がるように移動し、振り返ったミシャにかばんが投げつけられる。

「ちょ……な、何するんですか！」

「魔女なんぞに貸し出す家も部屋も空き地もない！ 町から出て行けっ！」

怒りの感情をそのまま叩き込んだように、扉は大きな音を鳴らして閉ざされた。地面に座り込んだまま啞然とする彼女の耳に痛いほどの静寂が刺さり、次の瞬間には連鎖する音が響く。

ありとあらゆる扉と窓が、一斉に閉ざされていった。

「な、なんなの……？」

ミシャの口からこぼれる問いに、徹底的な拒絶だけが返された。

二話 救いの手

あれから数時間——ミシャは教会にいた。

むしろ、教会にしかいることができなかった。

公園らしき場所では子供に逃げられ、親らしき大人に砂を投げられた。道を歩けばジロジロとぶしつけな視線を向けられ、反応すると殺される呪われるときゃあぎゃあ騒がれた。

それを聞きつけた人々がミシャを取り囲み、そこから必死に逃げて。

夕方になって、やっとここにたどり着いたのだった。

時間のせいかなが少ないここで、ようやくミシャは休息を取れたのだが。

「あなた、ランドールの話を知らなかったんですか」

「はい……」

応対してくれたのは、ここの教会を管理する司祭ネール。

年齢はずいぶんと若く、ミシャより少し年上のお兄さんという感じだ。薄茶色のやわらかそうな髪を、少しだけ長く伸ばしている。

あと数ヶ月放っておいたら、軽く結えそうな感じだ。

彼に淹れてもらった紅茶を飲み、ミシャは聞かされた話を頭の中で繰り返す。

焼け野原から必死に復興したこの町の歴史。

原因となり、いずこかへと消えた二人の魔法使い。

全ての土地で魔法が受け入れられる、なんて思ったことは無い。ただどまさかこのメルフェニカで、これほどまでに嫌われているなんて思いもしなかった。

魔法学校がある国で、物資が手に入りやすそうだったからランドールに来たのに。

「あなたの目論見は間違いではありません……が、あなたのスキルが問題だっただけです」

「そう、ですね……」

それからミシャの調査不足もある。

自分の都合で選んだ町の『都合』を、少しも考えなかったこちらの落ち度だ。

「まあ、この町のことはあまり知られていませんし、あまりご自身を責めないように」

「はい……」

「それより、あなたはこれからどうするんですか」

「どう、とは？」

「故郷に戻られるのか、それとも別の町に移動するのか」
すうっと、ネールの灰色の瞳が細められる。

冷たい視線に、ミシャは俯く。教会に属する人の中には、魔法を嫌っている人も少なくないと聞いたことがある。なのにこんなところに逃げ込んだりして、この上ない迷惑だろう。

「誤解される前に言いますが、私個人は魔法使いに悪い印象はありませんよ。ただ住民が駆け込んでくるのはうちですからね。……こちらにも、いろいろと事情がありました」

「……えっと、その」

希望に満ちて故郷を飛び出して、現地到着と同時に逃げ帰る。現実的に考えればそれしかないのはミシャにもわかっていた。けども、心のどこかがそれを拒否している。

できるだけ、この場所でごんばってみたい。

けれど、留まろうにもまず住む場所が手に入らなければ。あの様子だとミシャの存在や容姿は町中に知れ渡っていて、宿も門前払いだろうし。町から出るだけでも大変そうだ。

やっぱり一度、帰るしかないのだろうか。

小さくため息が零れる。

無意識に手を伸ばした紅茶は、すっかり冷めていた。

視線を上げると、ネールは変わらずミシャの前に座っている。外はさつきより少し薄暗くなってしまつて、時間の経過をミシャに教えてくれた。

「あああ、あのその、すみません。えっとその、あの」

「まあ、どうしてもランドールにいたいなら、近くの山の小屋でも貸しましょうか？」

「小屋ですか？」

「ええ。もう長らく使っていないものですが、一通りの家具はそろっていますし、特に何かを買い揃える必要は無いと思いますよ。あの山はこの町の住民も、ほとんど入りませんしね」

「い、いいんですか？」

「神は困っている人を見捨てません。それが何であろうとも」

今日はここに泊まっていきたいですよ、と彼は少し微笑み、立ち上がる。ついて来い、ということなんだろうか。ミシャは慌てて荷物を抱え、彼についていこうとして。

「あ、あのう……鍋って、ありませんか？」

申し訳なさそうに、そう言った。

○ ○ ○

次の日、ネールの手引きでミシャは町から脱出。

昼前には山小屋に到着していた。

話に聞いて抱いたイメージよりも、結構きれいな感じでミシャは驚く。

最低限の家具はあり、ただ生活するだけなら不自由は無いだろう。問題は食料だが、小屋の傍に小さな庭のような部分がある。ここを

畑にすれば問題ない。

種は森の中で探すか、街道まで行って商人から買うという道もある。家も部屋も手に入らなかったのも、お金には余裕があった。もつとも、あまりうれしくない余裕なのだが……。

「よし、がんばるぞー」

ゴトンと床に置くのは大鍋だ。底は深く、横にも広い。その中には古びた調理器具と、袋などに入った調味料が入っている。教会でいろいろと分けてもらったのだ。

この大鍋は昔、祭りなどでの炊き出しで使っていたという。

もう使うことも無いからと、タダ同然で譲ってもらってしまった。家まで用意してもらった上に無償はさすがに申し訳ないので、お布施ということで行くらか寄付をした。

荷物の仕分けは後でするとして、まずは――。

「鍋の置き場と、作業台を作らなきゃ」

小屋は今後使う予定もないし、おそらく魔女が住んだということでも使わないから好きにしてい、とはネールの話。一応は貸し出しなのだが、ほとんど譲渡されたようなものだ。

ミシャは調理器具などを鍋から取り出し、台所スペースにとりあえず並べていく。それからかばんから赤い液体の入った小瓶、さらにいくつかの鉱石と石材を取り出した。

それらを鍋の中に放り込み、部屋の中を見回し。

「よし……ここにしよう」と

選んだのは部屋の中央の壁際。ドアの真正面だ。

さすがに部屋の下真ん中は邪魔だろうから壁際にする。大鍋を好みの位置に置くと、ミシャは鍋の中で転がっている小瓶の封を切つて、中の液体を鍋の中に注いだ。

次にかばんから引っ張り出したのは、無色透明の結晶だけがついた銀色の鎖。握るのに最適な大きさの結晶の中央には、ほのかに白

い光が灯っている。

それを鍋の上に掲げて、ミシヤは小さく呟いた。

「――【赤色魔法式】展開」

その声に答えるように、鍋の中から光があふれ出す。それが引く頃には、穴こそ開いていないがさびて使えそうにない大鍋は、曲線の文様が描かれた新しい鍋へと姿を変えていた。

さらにはきれいな石造りのテーブルまで出現している。

ミシヤが腕を広げても両端に届かない、かなり大きなものだ。

「上出来、かな」

ミシヤは軽くなった鎖を見て苦笑する。そこにぶら下がっていた結晶は、跡形も無く消え去っていた。彼女が使った【魔法式】の代償として、鍋の中身と共に消えてしまったのだ。

安くはない一品だったが、仕方が無い。

「次は……」

ミシヤはかばんからまた鉱石と、液体入りのビンを取り出す。

作業は、遅くまで続いた。

三話 森の行き倒れ

ランドールについて三日ほど経った。

ミシヤの朝はそれなりに早い。

まだ薄暗いうちからベッドを出て、朝食の準備を始める。

昨日のうちに汲んできた水で料理用の鍋を満たし、拾い集めた木の枝を突っ込んだかまどに魔法で火をつける。干し肉を適当にちぎって、その中にポイポイと放り込んだ。

味付けは塩と胡椒であっさり。

「さてと、準備おっけい」

手を洗ってからさつと着替える。

これから今日と明日の朝使う水を、近くの川まで汲みに行く。まだ冷たいスープが煮えるまでの時間の有効活用だ。小屋の中にある樽がいっぱいになるまで、何度か往復するだろう。

髪も手櫛で適当に整え、バケツを持って出発だ。旅の間、荷物を入れておいたかばんも忘れない。何か使えそうなものを見つけたら、これの中に押し込むためだ。

それが終われば食事をし、拾ったものがあればそれを仕分けする。薪は外において乾かさないといけないし、触媒に使えそうならより使いやすく加工しなければいけない。

そう、そろそろ魔法の修行もしなければいけないのだ。

一応は、それが目的なのだから。

触媒合成に使う鍋と作業台はできたし、ボロボロだった調理器具やキッチンも昨日の大掃除でだいぶきれいになったと思う。本音を言えば次はベッド周りだが、これは後回しにしよう。

それよりも先に、畑を何とかしなければ。

種は――ひとまず、ネールに調達してもらうことになっている。

幸い、教会には小さな菜園があるらしく、そこで余ったものをわけてくれるそうだ。

何から何までお世話になりっぱなしで、だんだんと申し訳なくなってくる。

ネールに何か恩返しをしたいと、ミシヤは思うのだが。

「魔法じゃ……迷惑になりそうだなあ」
作業台を眺め、呟いた。

先日、魔法で作り出した作業用のテーブルには、所狭しと瓶が並んでいる。手のひらにすっぽりと収まるほどの小瓶が十数個と、かなり肉厚でずっしりとした大きさの大瓶がひとつ。

大瓶は青の、小瓶はいくつか空のもあるが、ほとんどが青と緑の液体入りだ。

このカラフルな液体は、魔法に必要不可欠な『魔素』。

魔法の基本たる【五色魔法式】を筆頭に、ありとあらゆる魔法に必要なものだ。

五色とは、赤、青、緑、白、黒の五つ。土は赤で、草は緑で、水は青。鉱物は赤であることが多いが、石の色によっては違う場合もある。白や黒に属する触媒はあまり多くない。

触媒だけではただの石で、ただの水で、ただの草。しかし魔素を付け加えることで、鍋を真新しいものに変え、テーブルを作り出すことだって不可能ではない。

魔法式の理論的につりあう魔素を用意できれば、何でも触媒に変えられるのだ。

一つだけ問題があるとすれば、触媒はそこの石ころで大丈夫なのに対し、魔素だけはそう簡単にはいかないというところだろうか。基本的に、魔素はお金を出して買うものだ。

自然界には存在しない、というより自然界に存在するが数が少ないものを人工的に作り出したもので、大規模な施設を所有でもして

いない限りは売られているものを購入するしかない。

現在、ミシャがストックしている魔素の量は、そう多いとはいいいなかった。

大瓶がひとつ残っている青はいいのだが、それ以外は厳しい。

町に住むことができれば、魔法を生業に収入を得ることもできた
だろが……。

「……やっぱり、引越すしかないのかな」

つぶやきながら、ミシャは家を出た。



教会で過ごしたあの夜、ミシャはネールに頼んで図書室に案内してもらった。寝付けそうになかったので、せっかくだから町の歴史を学ぼうと思ったのだ。

ランドール領はあの町以外にも街道沿いにいくつか町や村があるそうだが、基本的にランドールの町といわれる場合はあの町のことを言うのだという。

領主の屋敷を抱えている、ここが国ならば王都のような場所なのだそうだ。

なのであの町の名前もランドールというらしい。ほかにも知らなかったランドールの、歴史や慣わしなどを知っていくうち、ミシャの気分は少しずつ沈んでいくようだった。

ミシャがランドールを選んだのは、ある意味では直感だった。地図を眺めていて、なんとなく気に入った響きだったから、というのが最初だったように思う。

それからメルフェニカ王国のことを知り、姉弟子もいるし、街道沿いだからものも手に入りやすかろうというだけで、彼女は一人立

ちするための土地をランドールに選んだのだ。

やはり、それがまさかのこんな事態。

自業自得とはいえ、ツイてないにもほどがある。

「ほんと、どーしよっかなあ」

がこんがこんと木製のバケツを揺らしミシャは歩く。

予定外の事態で資金だけなら、かなり余裕があるといっている。

だが収入を確保しないといずれ枯渇する水源だ。別の場所を探すか、一度故郷に戻るべきなのか……まだ迷っている。

物心がつき始めるころから、ミシャの世界はシエルシュタインだった。

それ以外の場所を知らず、魔法だけで満ちた世界に生きてきた。

——初めてだった。

誰も知らない場所に来たのは。シエルシュタイン一門以外の人と、接したのは。だから未練がある。まだ足掻きたい。せめて一ヶ月。

いやもつと長く。……そんな風に葛藤している。

でもその一方で、心の一部はもう諦めている。

あれだけの反応を示されて、それでもがんばれるほどミシャは強くない。町に刻まれた傷跡の前では、ミシャなど存在しないにも等しいほどちっぽけだ。

にもかかわらず、魔女の襲来という言葉は、町の人々を苦しめる。

——じゃあ、ここに意味なんてないじゃない。

そんなことを思いながら、バケツの中を水で満たす。山頂あたりに水が湧き出している場所があるらしく、川の水量はかなりある。冷たくて、透き通ったおいしい水だ。

八文目ぐらいまで汲んで、小屋に戻る。どうせ往復するのが前提なのだから、無理をする意味は薄い。仮に足りなくなったなら、また川に向かえばいいだけの話だ。

「枝、落ちてこないな……」

木々を見上げて呟く。せいぜい煮るぐらいしか調理方法がない現状、薪の枯渇もまた死活問題といえた。それに温暖な時期になったとはいえ、水で身体をぬぐうのはまだつらい。

そういえば小屋の隅に鉋があった……気がする。

あれで枝を直接切り落とそうか。拾いにいく範囲を広げるのもいいけれど、それだと他のことができなくなってしまうし、遭難でもしたらそれこそ天国に一直線だ。それなりに人の手が入った山のようだが、時々獣の咆哮も聞こえるし……安全とはいいがたいだろう。小屋の周囲に、獣よけの魔法式をかけておいた方がいいかもしれない。

「たぶん、魔よけの応用だから――」

ブツブツ呟きつつ魔法式を組んでいると、近くでガサガサという音がした。草をなぎ倒すような、踏みしめるような、木の枝を揺らしたような。そんな葉と葉が擦れあう音だ。

思わず手にしていたバケツを落とす。

水が地面をぬらし、バケツはころころと転がった。

ミシャはぴくりとも動けずにいた。傍目には息を殺して周囲をうかがっているように見えるかもしれないが、ただ恐怖で息が細くなって、緊張で身体が石のようになっていただけだ。

仮に身体が動いたところで、腰が抜けているか、足が震えて歩けもしないだろう。そんな有様の中で、視線だけは過剰なほどに周囲を、きよろきよろと見回していた。

獣だろうか。

それとも違う何かだろうか。

動かないと襲われてしまうだろうか。むしろ、動く方が危ないだろうか。

「……っ」

ミシヤは齒を食いしばって、身体ごと音がした方を向いた。それは、ミシヤがいた場所から見てちょうど山の頂上の方角。上から転げ落ちてきた、という感じの音だった。獣か、モノか、それ以外か。……確かめなければわからない。

少し周囲を見回して、ミシヤはバケツを拾った。

……これでも、振り回せば武器の代わりになるだろう。

ゆっくり、ゆっくり、音がした茂みに近づく。

ひざを地面についてさらに進む。

できる限り静かに茂みを掻き分けて、そっと覗き込んだ先。

「……え？」

そこには――人が、落ちていた。

四話 治療

それは、小屋に住み着いた次の日の話。

わざわざミシヤの様子を見に、ネールが尋ねてきたことがあった。

「……ずいぶんと、きれいに整えたものですね」

小屋の中を見たネールの第一声はそれだった。

どうやら何度か入ったことがあるらしい。

「やりすぎ……ました？」

「……いえ、別に」

どうせ使わない場所ですから、とつぶやくネール。

それからの流れは、お茶を入れて、町の様子を尋ねたぐらいだろうか。そして、あまりのないようにミシヤの心は、若干粉のように碎けていた。

忌み嫌われているであろうことは、さすがに予想していた。

覚悟もあった。

だが。

「まさかの……バケモノ扱い、ですか」

肌は浅黒くしわしわで、杖をつく腰の曲がった老婆。長い髪を振り乱し、自らに異を唱えるものには災いとのろいを振りまく魔女。

……それが、町に流れる『魔女』のイメージだった。

老婆のような魔女だが、その気になれば大人の男性でも片手でひねり殺すこともできる怪力を発揮し、ドラゴンに姿を変えて町はおろか国すらも焼き払うという。

「あの……バケモノっていうか、まんま伝承の悪魔そのものという気がしますけど」

「魔法使いが町に来たのは、おそらく例の事件以降初めてですしね。住民の中では魔法と悪魔がイコール結ばれていますから、そういうイメージと噂になっても致し方ないでしょう」

と、ネールは涼しい顔をしているが、さすがにバケモノや悪魔扱いはシヨックだ。噂は今も尾ひれを増やしつつあり、教会にあれこれと相談に来る若い母親も多いという。

「ちなみに理由は、魔女がわが子を生贄に――」

「あーあー、もういいですー！」

説明を聞くのも疲れ果て、ミシャはテーブルに突っ伏した。想像以上の騒動に、必死に立て直しつつある心も粉碎されそうになる。今すぐこの現実を夢にしたくなった。

そんな感じにいろいろと情報交換をしたのだが、ネールは意外にも魔法使いのあれこれに詳しいらしく、ミシャがシエルシュタイン一門と知るとかなり驚いた様子を見せた。

シエルシュタイン一門が暮らす土地は遠く、そこから出ている魔法使いのほとんどがどこかの城仕えだったり、名のある貴族に雇われていたりするからだろう。

「あなた、本当にシエルシュタインなんですか……？」

「恥ずかしながら……」

「……そう、ですか」

驚いているというより、半ば疑っているような感じだった。

信じてもらおうとは思わないし、それを証明するだけの実力もない。一応、シエルシュタイン一門の紋章が入った、懐中時計なら所持している。師と師弟関係になった証の品だ。

なぜ懐中時計なのかは知らない。

聞いた話ではかつて『時間进行操作する魔法式』が存在し、それを編み出したのがシエルシュタインの名を持つ魔法使いだった……とのこと。真偽はわからない、魔法使い界限の伝説だ。

そんな話にあやかっただけなのか、弟子に時計を贈る習わしになったらしい。

「とりあえず、また様子を見に来ますよ」
そういつて彼は去っていった。

――次に会った時、ミシャはたずねたいと思う。

どうしてこんなにも親身になり、見返りもなく助けてくれるのか。でも今、それにもうひとつ用件があった。

「……どうしよう」

若干引きずりつつも、どうにか小屋までつれてきた『行き倒れ』。ぱっと見はミシャより上の、ネイルと同じぐらいの青年だ。それなりの家柄なのか、上等そうな服を着ている。ただ、かなり着崩しているから、粗暴さが強く感じられた。

目をしているから瞳の色はわからない。

茶色の髪は結構長く伸ばしてある。ランドールの町でも見かけたし、旅の間もよく見かけたよくある若者という感じだ。人のことは言えないが、山の中にいるような風貌には見えない。

事情も何もかも、彼が意識を失ったままである以上、何もわからないのだけれど。彼が意識を取り戻せないほどのケガをしていて、早く治療しないと危ないことだけはわかってる。

さっと見たところ、左足にひどいケガがあった。木の枝か何か、もしくは石などで挟まれた切り傷のような傷口。刃物でついたものではないのは、そのギザギザした痕跡でわかる。

他は些細な擦り傷だから、治療するまでもなく勝手に治るだろう。

「まずは消毒しなきゃ……」

水を桶にいれ、布を浸す。泥で汚れた顔などをぬぐう。

かすかにうめく声が、彼がまだ生きていることを教えてくれた。太ももの中間あたりにぱっくりと開いた傷口の少し上から、ハサミで洋服を切る。自分よりずっと体格のいい、意識を失った相手の服を脱がせるほどの腕力は、ミシャにはなかった。

あらわになった傷口を布でぬぐい、赤くなったそれを桶の水に浸す。

あつという間に水は赤く染まっていった。

次にミシャは壁につるしてある草——薬効のあるハーブと、緑の魔素を手取る。テーブルの下から即席の道具を取り出し、魔法の力で効力を高めた薬を作り始めた。

本当は医者に見せた方がいいのだろうけど、そんなヒマはない。今はできることをやるしかなかった。



魔法は万能なものではない。

ヒトが作り出した技術だからこそその限界がある。

特に治癒系統の魔法式は、素材の効能を高めるぐらいしかできない。

あるいは、傷が治るまでの時間を短縮するぐらいだろうか。

火薬が生まれたことで、特に火を作る攻撃系統の魔法式が発展したように、いつか治癒系統も劇的な力を持つものかもしれないのだが、今はまだそこに至るだけの触媒は存在しない。

ただ、コツがあつた。

魔石を使えば更なる効能を得られるのだ。

元々、魔法に使われていたのは『魔石』という結晶だった。精霊から放出された彼らの力が形になった、無色透明の結晶だ。飲み込めるほどの小粒の石であることが多い。

ミシャが大鍋を直しテーブルを出現させたときに使った、無色透明の結晶。あれはかなり大きい方の魔石だ。そう見つかるものではないので、買うとしたらかなりの値がつくだろう。

以前、姉弟子からプレゼントされたので、正式な値段は知らない

が、知りたくもない。おそらく別のことに使ってほしかったのだろうし、ミシャでは手も届かないほど高額だろうし。

ただ、小粒なものは結構頻繁に見つかるので、魔素ほどではないが手ごろだ。それでも使いまわれるほど見つからないので、魔素という便利なものが作られたのだが。

「んしょ……」

ごりごりごり、とすり鉢から音がする。

傷口に直接塗りこんで魔法式を展開するために、魔石を追加しているのだ。魔石も魔素も人体に悪いものではないので、魔法の触媒として使わなくても充分薬として使えるものだ。

とはいえ、さすがに石のように硬いものをすり潰すのは、なかなか体力を使う。

手のひらは痛み、額には汗が滲んでいた。けれどミシャにはこれしかない。これ以外に彼を助ける術がない。体重を乗せ、ごりごりという音を立てて、魔石を粉々にすり潰し続ける。

そうしてようやく出来上がった緑色のペーストを、傷口に丁寧に塗りこむ。

それが染みるのか、青年が顔をしかめてうめき身をよじろうとした。

「じっとしてください……！」

意思のない相手に言ったところで仕方ないが、それでも声は聞こえているのか青年はおとなしくなる。その隙に、残りのペーストで傷口を埋め終わる。

「――【緑色魔法式】展開」

傷口に手のひらをかざし、呟く。

身体の中から何かが吸い出されていく感覚がある。

吸い出すというよりも、引きずり出される吐き気のような感覚かもしれない。これはミシャの中の魔力と呼ばれる力が、対価として

失われていく感覚だ。

魔法使いとしてのわかりやすい優劣基準の一つが、生まれ持った魔力という力の量。いかなる類の魔法でも使ったら使った分、術者はそれに似合う量の代償を失わなければいけない。

保有する魔力の量が多いほど、魔法を使える回数が増えるのだ。

その魔力は魔法に使われているというよりも、展開された魔法を安定させるために使っている感じなのだ、ミシャは以前、何かの書物か師の講義で見聞きした気がする。

特に魔石を使った場合、失われる魔力の量はかなりのものになるという。魔法の効力が増せば不安定さ同時にも増してしまい、それを支えるために力をより使ってしまうのだそうだ。

「……ふう、これでよしっ」と

しばらくしてミシャは腕を下ろす。

傍らに用意してあった二種類の、細く咲いた布のうち、わずかに色がついた方を足にくくると巻き始めた。薬湯を染み込ませた即席の包帯で、傷を悪化させるばい菌避けのためだ。

次に白い方を巻いていく。きつすぎると血の流れが悪くなってしまうので、適度に緩くした方がいいという話を聞いたので、解きやすいように、でも外れないようにきゅっと結んだ。

念のために下熱効果のある薬湯を飲ませ、傍らで様子を伺う。

後はどうなるか、天に委ねるしかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0486y/>

ランドールの魔女

2011年11月2日15時07分発行